

ジャポニスムふたたび パラダイムシフトの秘訣は「美」

SDGsの正式名称は「我々の世界を変革させる：持続可能な開発のための2030 アジェンダ」である。人類の存続すら危ぶまれる近未来を目前にし、今まで当たり前とっていた事柄に対し、「意識の変革」を行う「パラダイムシフト」が迫られている。

興味深いことに、西欧の芸術分野においては、一足先の19世紀末に日本文化の影響を受けて「パラダイムシフト」が起きている。

たとえば、人間が自然を支配するのではなく、人間は自然の一部であるということへの意識の変革。それまでの絵画表現の多くは、人物が主役で風景は人物の背景であった。それが日本の絵画に出会い、人物と風景の主客が逆転する。

どこまでも続く野原のはじっこに、散歩する人物が小さく描かれる、などという構図は、まさに「パラダイムシフト」の賜物である。

さらには、池に浮かぶスイレンや、ヒマワリ、空に浮かぶ星や月が、主役となって画面上を賑わいはじめる。

また、エミール・ガレのガラス工芸のように、魚や蛙、トンボなどの小動物にも存在価値が与えられ、芸術表現の世界に生物多様性が急速に広がった。

人間だけがこの世界の主役ではなかった、という意識の変革が、少なくとも芸術表現の分野では19世紀末に成就している。

西洋人にとって「人間中心主義」とは、ギリシャ・ローマ時代以降、脈々と継承されてきた価値観である。既存の価値観を崩すことは少なからず抵抗があったはずだ。それをよりによって名もない極東の小島の住人らに気付かされるとは！西洋人のプライドは何故それを受け入れたのだろうか。

その理由は、日本の芸術が、それほどまでに「美しかった」からではないだろうか。

全人類に課せられたSDGsという変革。それを痛みではなく喜びをもって成し遂げていきたい。その秘訣は「美」にあるのではないかと信じている。

挿絵：風日祈の歌

